



ぼくは今日おにわで変なものを見つけました。

おかあさんが大事にしてるピンク色のバラの花に、小さな人が隠れているを見つけました。

こびとはぼくのおかあさん指より小さいみたいでした。

ぼくがつかまえようと、手をのばすといっぱいある花びらの中にかくれちゃいます。

ぼくがお花にはさわらないで待っていると、また顔をだします。こんどはさわらないでそのままかんさつすることにしました。

よく見ると、こびとさんは女の子みたいでした。洋服は葉っぱで出来ています。

最初はぼくを怖がっていたけど、ぼくがなにもしないことがわかると、花びらのあいだから出てきて、大きく伸びをしました。

そしてバラの花の上でおどりだしました。こびとさんが花の上でステップを踏むたびにバラの花は右に左にと、ゆれていました。

風に乗ってかすかに歌声が聞こえます。近くにいるぼくにしか聞こえない小さな、小さな、お声です。

小さなこびとさんが小さなお口でうたう歌は、ぼくの知らない言葉だったけど、すごく気に入りました。

こびとさんの歌に夢中になっていると、おうちの中からおかあさんがぼくを呼びました。まわりを見ると、お空は真っ赤な夕焼けになっていました。

ぼくはおなかもすいたのでおうちにかえりました。

次の日もぼくはピンクのバラの花を見におにわに行きました。お花にこびとさんはいませんでした。

ぼくはお花の前にしゃがんでじっと待っていました。

しずかにしていると花びらがカサカサと動いて昨日のこびとさんが顔を出しました。

こびとさんは近くにいるのがぼくだけだとわかると、お花の上に出て来て今日も歌ってくれました。

それから、ぼくは毎日おなじ時間にこびとさんの住むお花を見に行くようになりました。

こびとさんの歌はお天気によって違うみたいでした。晴れの日には元気な歌、くもりの日は静かな歌、雨の日には悲しい歌。

ぼくは雨の日もかさをさしてこびとさんの歌を聞きにいきました。おかあさんはぼくはお花が大好きなのだと思っているようでした。

そんなある日、いつものようにこびとさんに会いに行こうとすると、おかあさんに、今日はお外に出てはダメよ。と言われました。

どうして、とたずねると、今日はお庭にお薬をまくといいました。そのお薬でお花につく付く悪い虫をやっつけちゃうそうです。

大変です。そんなことされたらきつとこびとさんも死んでしまいます。

ぼくはあわててお庭に飛び出しました。

お庭にはマスクをつけたおじさんたちがいて、お花にくさいお水をかけていました。

きつとあれがお薬なんだと思いました。

こびとさんのバラにはまだお薬はかかってないみたいでした。

なんとかこびとさんだけ助けようとしたのですが、大人の人が近くにいるのでこびとさんが出てきてくれそうにありません。

いつものようにゆっくり待っている時間ありません。

ぼくは仕方なく、こびとさんのかくれたバラの花をつみとりました。

ちょうどその時おかあさんがぼくを探しておにわに出てきました。

おかあさんはぼくをおこりました。

ぼくはおかあさんには見つからないように、お花をお服のおなかのところにかくしてお部屋にもっていきました。

バラのお花にはトゲトゲがあって、おなかにチクチクささりましたが、おかあさんに見つからないようにぼくはいっしょうけんめいガマンしました。

お部屋にもどるとぼくはコップにお水を入れてきて、お花をつけてあげました。

これならば、雨の日でもゆっくりこびとさんの歌がきけるのでぼくはうれしくなりました。

いつもと同じようにだまってお花を見ていると、ゆっくりと花びらがひらいてこびとさんが顔を出しました。

こびとさんはいつもとちがう場所につれてこられたから怖がっているみたいでした。

ぼくはにっこりわらってこびとさんを安心させてあげました。

こびとさんはぼくを見つけてゆっくりと花の中から出てきました。

ぼくが歌をききたいと言うと、くもりの日にうたう静かな歌を歌ってくれました。

ぼくは元気な歌が好きだったので、元気な歌を歌って下さい。とお願ひしましたがこびとさんは首をふって歌ってはくれませんでした。

その日は、いつまでまっても、こびとさんは元気な歌を歌ってはくれません。

いつまでもいつまでも、静かな歌と悲しい歌を繰り返し歌っているだけでした。

次の日になってもこびとさんは元気な歌を歌ってはくれませんでした。

お水にさした花は少し元気がなくなったように見えました。

こびとさんもお花と同じように元気がなくなってきていました。

ふつうでも聞き取りにくい小さなお声は、お耳をお花にくつつくくらい近づかないと聞こえなくなっていました。

ぼくは、おかあさんがお花を育てるときには、いつも肥料をあげているのを思い出しました。

おかあさんに見つからないようにお花の肥料を持ってきて、コップの中に入れてみました。

きっと明日にはお花もこびとさんも元気になるはずです。

ぼくはそれを楽しみに、お花が見つからないようにおもちゃ箱の中にかくしました。

次の日、お花を見たぼくはビックリしてしまいました。

お花は元気になるどころか、ぐったりと下を向いていました。

あわててこびとさんを探すと、こびとさんは花びらの間ですっかり動かなくなっていました。

どうすることもできないぼくは、急いでお花をコップに入れたままおかあさんのところに持っていきました。

ぼくは、こびとさんのことをおかあさんに話しました。

おかあさんはだまってぼくの話聞いてくれました。

おかあさんはぼくの手の中にあるお花を見ました。でも、おかあさんにはこびとさんの姿は見えていないみたいでした。

おかあさんはこびとさんが見えなくてもぼくの話をしんじてくれました。

でも、お花はつんでしまうと、お水に入れてもそんなに長くはもたないと言われました。

ぼくはかなしくなりました。

ぼくがお花をつんじゃったから、いけないんだと思うとなみだが出てきました。

ぼくのなみだがお花の上に落ちました。

すると、まったく動かなかったこびとさんの体が、花びらの間で少しだけ動きました。

ぼくが声をかけると、こびとさんはぼくの方を見て、小さく微笑みました。

そしてそのしゅんかん、こびとさんのつつまれた花びらはバラバラになってちってしまいました。

ぼくはあわてて手を伸ばしましたが、花びらは指のすきまをスルリと落ちて床に散らばってしまいました。

そして、、、こびとさんも消えてしまいました。

大きな声で泣き続けるぼくを、お母さんは抱きしめてくれました。

そして、ぼくがこびとさんのことを忘れなければ、またいつか会えるとおしえてくれました。

それでも、ぼくのなみだは止まらなかったのです。

あれから、こびとさんの歌は聞こえません。

おにわにはたくさんのお花が咲いているのに、どのお花にもこびとさんはいませんでした。

こびとさんがいなくなってからも、ぼくは毎日おにわに出てこびとさんを探しました。

そして毎日、忘れないようにこびとさんの歌をうたいました。

言葉がわからなくてでたらめだったけど、いっしょうけんめい歌いました。

そうして一年がすぎました。

季節はまた春を迎えました。

ぼくには妹ができていました。

妹が初めておうちにきたとき、いつまでたっても泣き止みませんでした。

ぼくは妹に毎日歌っているこびとさんの元気な歌を歌ってあげました。

すると、妹はピタリと泣き止み笑顔を見せました。

なぜだかその笑顔は、ぼくにとって、とても懐かしいものに感じたのです。

終わり